



●全国大会山形の思い出

山形大学で開催された全国大会では、発表の機会を戴き、皆様から多くの示唆と学びを得ることができ、たいへん有益な経験となった。また一方で、紅花染めの伝統技術に触れるという貴重な体験にも恵まれ、深い感銘を受けた。

紅花は古来「赤絵」の魔除けや疱瘡流行時の皮膚治療に使われ、東大寺修二会や伊勢神宮式年遷宮でも装束や造花に用いられてきたが、奈良・纏向遺跡の3世紀初頭の層からも紅花の痕跡が確認され、伝統の重厚さに圧倒される。また、山形大学農学部によるDNA解析では、山形の紅花は中近東由来の野生種との近縁性が指摘され、戦時の播種困難の中で種子の保存で命脈を保ってきたという。「韓紅花」「濃紅」の色名に見られるように、紅花の色彩は文化的分類も豊かで、紅は重ね塗りにより玉虫色の光沢を帯び、「紅差し指」の語にも象徴性がある。現場では、草木灰による抽出液でシルケット綿を染め、烏梅（梅の実を燻製にした生薬）や生酢を加えることで紅特有の「濡れ色」が現れる様子を観察させて戴き、この素朴で温かみのある色調や質感を今後の研究に活かしたいと思った。（幹事：榎芳栄）

●JIS Z8110 光源色の色名

この規格は、光源から発する光の色で、発光しているように知覚される色の名称について規定されている。

光源とは、光を発するもので、照明光源、発光ディスプレイデバイスなどを含む。

色名は系統色名と慣用色名に区別され系統色名は、基本色名とそれに修飾語を組み合わせたものとなる。基本色名は、赤、黄赤、だいだい（橙）、黄、黄緑、緑、青緑、青、青紫、紫、赤紫、ピンク、白の12種で、対応英語と略号が示されている。また、基本色名に用いる色相に関する修飾語は、赤みの、黄みの、緑みの、青みの、紫みの、オレンジの6種類。鮮やかさに関する修飾語は、うすいと鮮やかなの2種類である。

慣用色名は、（1）無彩色の色名が白色の1種類。（2）有彩色の色名が、赤色、黄色、緑色、青色、紫色、オレンジ色、だいだい色、黄緑色、青緑色の9種類。（3）特にうすいことを示す色名に、桃色、黄白色、緑白色、青白色。（4）特に鮮やかなことを示す色名に、純赤色、純黄色、純緑色、純青色、深赤色。（5）白色を細分化して、電球色、温白色、白色、昼白色、昼光色、月光色、昼光白色。（6）紅赤色、シアン、マゼンタがある。（永田泰弘）

●大辞泉ひろいよみ 84 一こ

紅毛船：こうもんせん。江戸時代、オランダ船の俗称。スペイン・ポルトガルの南蛮船と区別している。のち、広く外国船のこと。

黄門：中納言の唐名。水戸光圀の通称。水戸黄門。

紺屋：こうや。こんやの音変化。染物を業とする者。また、その家。元、藍で布を紺色に染める者をさした。染色を行う家は、古くは紺屋・紅屋・茶屋のように、得意とする専門の染め色で独立していた。こんかき、こうかき。

紅葉：こうよう。秋になって、葉が紅色に変わる。また、その葉。葉緑素がなくなり、アントシアニンなどの色素が蓄積して起こる。黄葉を含めて言うこともある。もみじ。

黄葉：こうよう。秋になって、葉が黄色に変わる。また、その葉。葉緑素を失い、カロチノイドが目立つようになって黄変する。

黄落：木の葉や果実が黄色にいろ付いて落ちること。

紅蘭：こうらん。紅色の花が咲く蘭。

光量：一定の面を一定時間内に通過する光のエネルギーの総量。

黄梁：こうりょう。オオアワの別名。

*大辞泉：小学館発行国語辞典（永田泰弘）